

異文化理解：言語からのアプローチ

「よろしく」に内包される曖昧さと依存性

A Linguistic Approach to Cross-cultural Understanding Ambiguity and Dependency Connoted in 'yoroshiku'

高 橋 寿 夫

TAKAHASHI Toshio

Abstract

It has been a long time since human societies on the earth were called a “global village.” The international communication network crossing many borders thanks to remarkable development of information technology has enabled us to exchange views and ideas for mutual cooperation, existence and prosperity, but there still exist critical disputes and frictions among the nations or the peoples. Although we are apt to attribute them to miscellaneous problems of politics and economics, we consider it important to step into history, culture, national character (ethnicity) of both sides and investigate these differences. Specifically, we understand that cross-cultural understanding is essential in all cases to reach a true solution for the peaceful coexistence.

In this paper, I attempt to approach intercultural understanding from a linguistic viewpoint. I will examine the term ‘*yoroshiku*’ often used in our daily life as a convenient expression of the request, and compare it with an English equivalent, though there can’t be found an equal expression with strictly the same meaning. Therefore, I will discuss the psychology of those who use the expression with the purpose of clarifying the cultural difference cultivated among its users.

キーワード

異文化理解 (cross-cultural understanding) 文化的背景 (cultural background)
対人関係 (interpersonal relationship) 曖昧さと依存性 (ambiguity & dependability)
文化相対主義 (cultural relativism)

1. はじめに

地球上に生活を営む人間社会がグローバル・ビレッジ (global village) と称されて久しい。進歩の著しい情報通信技術により、国境を越えた通信ネットワークが構築され、瞬時にして世界の情報が掌握でき、また、経済のグローバル化・交通手段の発達により人的交流がますます

隆盛を極め、世界の人々がお互いに歩調を合わせ、交流を深めて共存共栄を図ることが強く求められる時代となったが、反面、地球上ではいままって国家間あるいは民族間の紛争や摩擦が絶えない。原因として、表面上は政治や経済上の諸問題がとやかく言われるが、深層に横たわる歴史・地理的環境・文化・国民性(民族性)などにまで踏み込んだ原因究明がなされなければ、真の解決は得られないのではあるまいか。特に、文化相対主義、つまり、自文化を基準にして異文化の優劣を評価するという態度を排除し、すべての文化はそれなりの存在価値を有するという考え方に基づいて、異文化を持つ相手を理解し、尊重することが大切で、異文化理解に努めることは地球市民の平和共存への一助になると確信する。

異文化理解には、衣・食・住、宗教、教育など、さまざまな角度からの検証が可能であるが、言語面からのアプローチも効果的な手法であると考えられる。本稿では、日常生活でよく使用される言語表現(日本語「よろしく」)を取り上げ、それに対応する外国語(英語)表現とをつづさに比較・検討して、その文化的背景の違いを浮き彫りにし、その言語表現から推測しうる国民性にまで探究し、異文化理解へ通じる一端を考察する。

2. 言葉から窺える国民性

言葉は文化の重要な担い手である。特定の言葉が持つ意味や使われ方を詳細に分析したり、他言語と比較することは興味深い結果を引き出してくれる。

「侘び」「寂び」のような深遠な日本文化を代表する言葉とは別に、英語に直し難い日本語に「よろしく」「よろしくお願ひします」がある。「よろしく」は実に簡潔で、当りの柔らかな「依頼」の表現として、また座りのよい「結び」の言葉として重宝され、日常生活で多用されているが、英語では厳格な意味での同等表現は見当たらない。「よろしく」の使用心理を観察していくと、対人関係における心的態度など、日本文化に培われた日本人特有の国民性(国民や民族に持続的にみられる性格の特性や生活様式)が見えてくる。

3. 「よろしく」の意味合い

「よろしく」という言語表現上の意味を歴史的に検討し、現在、どのような意味合いで使用されているのかを考察する。「よろしく」は語源的には、上代・中古より物事の価値判断に使用されていた「よろし」の連用形で、現代では挨拶語や依頼表現としてよく用いられている。「よろし」とその類語「よし」の相違を確認するところから始めたい。古語辞典には次のように定義されている。

(1) 「よし」と「よろし」の意味の対比

「よし」はプラスの価値判断を示す語として、最も一般的な語である。「よろし」よりも、さらに優れた評価を意味する語で、平安時代、物事の価値は、一般に「よし」「よろし」「わろし」「あし」の順であったといわれる。（新選古語辞典）

「よし」が積極的に良の判定を下しているのに対し、「よろし」はわるい感じではない、まあ適当、相当なものだ、一通りの水準に達している、の意。（岩波古語辞典補訂版）

「よろし」は悪くはないという程度で、十分に満足できるものではないが、まあまあという感じ。（古語辞典第九版）

価値を評価する語「よし」「よろし」「わろし」「あし」のなかで、とくに、価値が高いのが「よし」で、比較的よい、まずくないの意の「よろし」より高い評価を表す。

（角川金沢古語辞典）

要するに、「よろし」は「よし」ほどの優れた価値判断を示す語ではなく、十分に満足とは言えないが、「ほどほどによい」程度の意味で、はっきりと「よい」とは断定せずに良さもほどほどであると一歩控えているところにこの語の存在価値を見る。

(2) 「よろしく」の現代的意味

続いて、「よろしく」の現代的意味合いを調べてみると、明らかに「よろし」の歴史的意味合いを引き継いでいることがわかる。

（形容詞「ヨロシ」の連用形から） ほどよく。適当に。「頼む」「あいつのことだ。

やっているだろう」（「よろしくお願いします」「よろしくお伝え下さい」などの略）
挨拶の語。「どうぞ」「今後とも」「皆さんに」（広辞苑第五版）

〔形容詞「よろし」の連用形から〕 適当に。うまい具合に。「彼のことだから、どうせやっているだろう」相手に便宜をはからしてもらうときなどに、相手の好意を乞い促す意で用いる語。また、そういう気持ちをこめて言う挨拶語。「どうか 願います」「お引きまわしのほど」「お伝え下さい」「今後とも」「どうかみなさまにも」（スーパー大辞林）

4. 「よろしく(お願いします)」の真意

「よろしく(お願いします)」は、その時々に応じた特別なはからいを相手に乞う際に用いられるが、「相手の立場で出来る範囲で、自分にほどほどの好意を期待する」という意味で、「是非とも」とか「何がなんでも」というような威圧的に或は強制的に相手の好意を引き出そうとする表現ではない。「けっして無理を求めない程度で」、「差し支えない範囲で」相手の好意にすがりたいという、むしろ控え目な表現で、日本語特有の奥ゆかしさを彷彿とさせる言葉で

ある。従って、相手は強い義務感や責任感を抱くことなく、適当に対処すればよく、その依頼に強い反発や不満を感じることもないので、「よろしく(お願いします)」は耳に心地よく響く表現として巷で頻繁に用いられていると考えられる。

5. 「よろしく」に対応する英語

「よろしく」に対応する英語はないと言われている。確かに、「いぬ」は 'dog'、'つくえ' は 'desk' のように、1語で片付けられるような対応語は存在しないが、和英辞典には「よろしく」の項目に相当のスペースが費やされているものも多く、英語でも「よろしく」と同じ意味内容を表現することが可能であるということを示している。ただし、「日本語の『よろしく』はその意味・用法・発想において非常に日本語的で、独特のものをもっている。従って、この語をそのまま英訳しようとすると、かえって不自然でわかりにくい英語になってしまうことが多い。」(小島, 2002) とあるように、「よろしく」の英訳には前後関係を考えて意識したり、省略したりすることが求められる。

6. 「よろしく」—— 3つのカテゴリー

「よろしく」の分類に定説はないが、次の3つのカテゴリーに区分けするのが理解しやすいであろう。なお、(1)「挨拶」と(2)「伝言」は特定の場面での使用(たとえば、挨拶は初対面のときなど)に限られるので、応用範囲は狭い。やはり「よろしく」は使い勝手のよい「依頼」の表現としてとらえたい。

(1) 挨拶

はじめまして。どうぞよろしく。

How do you do? I'm glad to meet you.

健二です。よろしく。

My name is Kenji. Nice to meet you.

「よろしく」は、一般に「お会いできてうれしい」に当たるとされるが、場面によっては「これから良いおつきあいをしていきたいと思います」とか「一緒に働くことを楽しみにしています」という積極的な意味を含んでいる場合もあり、I'm looking forward to working with you. などが後に付加されてもよい。

(2) 伝言

ご家族によろしくお伝えください。

Please give my best regards to your family. / Please say hello to your family.

母がよろしくと申しておりました。

My mother sent you her greetings .

「伝言」を区分けの1項目として立てること（「挨拶」の範疇とも考えられる）の是非はともかく、「好意」や「案ずる気持ち」を伝言する表現である。簡潔にしてこの意味合いを伝える日本語は他に見当たらない。

(3) 依頼

人に何かを依頼するとき、ふつう何を依頼するのか、相手に明確に示す必要がある。依頼することが不明瞭で相手に伝わらなければ、相手もどう対応してよいのか困惑する。英語圏では依頼内容をはっきりとさせるのは当然のことで、相手の推断に委ねるということはまずない。日本語では、「よろしく(お願いします)」を用いて、依頼を表現することが多いが、「何を」に当たる部分を特定している場合と漠然としている場合がある。

(a) 依頼の内容を特定している場合

留守中、ポチの世話をよろしくお願いします。

Please take care of our dog " Pochi " when we're away.

あなたの上司にご紹介のほど、よろしくお願いします。

I'd appreciate it if you could introduce me to your boss.

息子を泊めてくださるそうで、よろしくお願いします。

Thank you for letting my son stay with you.

「わかりました。引き受けましょう。」「よろしくお願いします。」

" O.K. I'll do that. " " Thank you. "

私はもう帰ります。後のことはよろしくお願いします。

I'm going home now. I'll leave the rest to you.

館内は禁煙となっています。ご協力のほど、よろしくお願いします。

Smoking is prohibited in this building. Thank you for your cooperation.

「よろしく」は使用範囲の広い言葉で、同じ「よろしく」であっても、場面によってその意味合いが少しずつ違う。英語に直す場合、内容を的確に把握した上での意識が求められる。逆に言えば、英語ではこのように違う内容を日本語ではすべて「よろしく」で片付けることができるのであるから、「よろしく」が意味上いかに曖昧で、聞き手に適宜な解釈を強いる言葉であるかが分かる。

(b) 依頼の内容が漠然としている場合

年賀状の決まり文句「今年もよろしく(お願いします)」や日常会話などで“社会潤滑油”的に交わされる「今後ともよろしく(お願いします)」などには何を願うのか、依頼の内容が示されず、漠然としたままである。あえて英訳すれば、場面に応じて、次のような様々な英文が考えられる。

(今後とも)(なにぶん)よろしくお願いします。

I look forward to our continued friendship.

Please continue your favors toward me.

I hope for your continued goodwill.

I shall appreciate your continued guidance and encouragement.

Please feel kindly disposed toward me.

I look forward to your continued cooperation.

I hope that you will continue to help me.

この場合の「よろしく(お願いします)」は相手の好意や適当な判断・情報などを依頼する気持ちを漠然と表す日本的表現であって、英語にはピッタリの対応表現はないとされる。

上例は和英辞書などからの「よろしく(お願いします)」に対する英文訳であるが、いかにも翻訳調で、具体的に何を「よろしく」願うのかには触れず、依頼の内容がぼんやりとしてはっきりとしないため、異文化の人々には真意を掴むのに苦慮する英文表現であると言える。

7. 「よろしく」の曖昧さ

前述のとおり、「よろしく」は多様な意味・意図を内包するという、その曖昧さゆえに、「よろしく」に意図された真意の解釈はある程度聞き手に委ねられている。聞き手も必ずしも的確な解釈をしているわけではなく、話し手の意図していることを深く詮索するようなことはせず、適宜推測して、それで満足する。これは、はっきりとものを言うコミュニケーションを尊重する欧米の社会では通用しないが、以心伝心とか、阿吽の呼吸とか、漠然とした感触を通じて理解し合う、つまり、曖昧さが何となく容認される日本社会において可能なのである。曖昧さを助長する言葉も「相変わらず、結構、それなりに、とりあえず、なんとなく、どうも、ほどほど、前向き」など、枚挙に暇がなく、それに謙譲や婉曲表現が加わり、言語表現上の曖昧さは“奥ゆかしさ”さえ感じさせるほど、日本語に定着しており、曖昧さは日本人を理解する上では欠かすことのできない要素なのである。

もちろん、英語にも曖昧な表現はある。断定を避けたり、明確な原因や理由を言いたくない場合などに用いられる。例を次に掲げる。

I think she is right . (彼女は正しいと思う。)

Rumor says he divorced . (噂によると彼は離婚したそうだ。)

It seems that Bob quit his job for some reason or other .

(ボブは何がしかの理由で仕事をやめたらしい。)

このような曖昧表現は英語に限らず、日本語を初め、どの言語にもある。「よろしく」が内包する曖昧さはこれとは本質的に違っている。「よろしく」は、その曖昧なところに深い意味があって、その表現は発せられる状況によって意味合いが違ふ。明確な表現は誤解を生むことはないが、はっきりしているゆえに融通がきかず、対人関係に水を差すこともありうる。「よろしく」は、その曖昧さゆえに理解に一苦労することがあるかもしれないが、漠然と話し手と聞き手を柔らかく包み込み、滑らかな人間関係の構築に寄与している。「よろしく」は依頼する表現でありながら、相手にさほど嫌悪感を抱かせることがないという不思議な言葉である。

8 . 「よろしく」の依存性

人は無人島にでも住まない限り、他人の助けや恩恵を受けずに生活はできない。つまり、人はだれでも他人に依存して生活しているのであるが、その依存性の度合いは生活環境により異なってくる。島国の農耕民族である日本人の依存性が強いことは、その生活を支えてきた農業や漁業と深い関係がある。米や麦の耕作、漁で魚を捕る作業は一人では能率が悪い。田植えや稲の刈り取りは短期間で済ませなくてはならないし、魚の網はタイミングよく、一斉に引き上げなくてはならない。集団で助け合わなければ、生活がおぼつかないのである。集団で働くことの必要性から、自立性を控え、個に対して集団を優先し、上下関係を重んじ、相手を立て、相手に助けを求める風潮が長い年月を経て生活習慣の中に定着してきたと考える。この「依存性（依存志向）」は「甘え」とも受け取られる。「甘えは人間的交流を円滑にするために、欠くべからざるものがある...」(土居、1971)とあるように、周りの人々に「甘え」ようにする「依存性」は円滑な人間関係を導くのに重要な役割を果たしており、何かにつけて「よろしく」を連発し、相手に依存している姿を見せるのは、日本人の考え出した生活の知恵でもある。

次に示す一文は、日本で長年暮らしたアメリカ人女性が「依存性」の強い日本人について書いたもので、独特な国民性を浮き彫りにしている。

In Japan, you must politely emphasize the other person's superiority and power, and your own corresponding inferiority and weakness. Thus, it is polite to imply that you will always need the other person's help. "Dozo yoroshiku" asks for help, not only for a specific problem, but as a general condition. The Japanese polite fiction is that "I depend on you," not just in certain situations, but all the time. (Sakamoto, 2004)

「日本人は、相手を持ち上げ、自分は下手に出て、相手の好意にすぎらうとするが、それも特定の場合(事柄)についてだけではなく、常時である。」と手厳しいが、興味深いのは、「よろしく」と相手に依存している姿勢を示すのが日本の礼儀であるとしているところである。

9. おわりに

日本語の持つ特異性を披露して、日本人やその国民性を異文化の人々に理解してもらおう。英語という言葉を検証することによって、英語国民を理解する。つまり、言語からのアプローチにより、異文化理解を深め、異文化に優劣をつけず、異文化を持つ相手を理解し、その存在を尊重する。そこには、相互に摩擦や軋轢は生じ難く、ひいては地球市民の平和共存に向けて貢献することにもなりうるのである。

日本語には、他言語と比較することによって、初めて、その特異性が浮き彫りにされる表現が多くある。その意味合いを探ることは興味が尽きず、今後も続けていきたい研究分野である。

参考・引用文献

- 池田理知子 (2000) 『異文化間コミュニケーション入門』 有斐閣
大野 晋 (1996) 『岩波古語辞典(補訂版)』 岩波書店
岡田泰行 (1994) 『アメリカからみた日本 日本からみたアメリカ』 明石書店
久保田淳 (2002) 『角川金沢古語辞典』 角川書店
黒沢 勉 (1999) 『コミュニケーションの世界 言葉と心』 信山社出版
小島義郎 (1995) 『カレッジライトハウス和英辞典』 研究社
Sakamoto, Nancy (2004) *Polite Fictions in Collision* Kinseido
佐野正之 (1995) 『異文化理解のストラテジー』 大修館書店
新村 出 (1998) 『広辞苑第五版』 岩波書店
鈴木寛次 (2003) 『異文化間コミュニケーションの技術』 講談社
土居建郎 (1971) 『甘えの構造』 弘文堂
遠山 淳 (1997) 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』 有斐閣
直塚玲子 (1980) 『欧米人が沈黙するとき』 大修館
西田 司 (2002) 『異文化間コミュニケーション入門』 丸善
藤井健三 (2003) 『日本の挨拶ことばを英語でどういうか』 日本実用英語サービス
古庄敏行 (1997) 『日本はなぜあいまい文化なのか』 広済堂
古田 暁 (2001) 『異文化コミュニケーションキーワード』 有斐閣
松村 明 (2001) 『古語辞典(第九版)』 旺文社
麦倉達生 (2004) 『異文化理解へのアプローチ』 大学教育出版
毛受敏浩 (2003) 『異文化体験入門』 明石書房
山岸勝栄 (2004) 『英語になりにくい日本語をこう訳す』 研究社
中田祝夫 (1989) 『新撰古語辞典』 小学館
松村 明 (2002) 『スーパー大辞林』 三省堂